

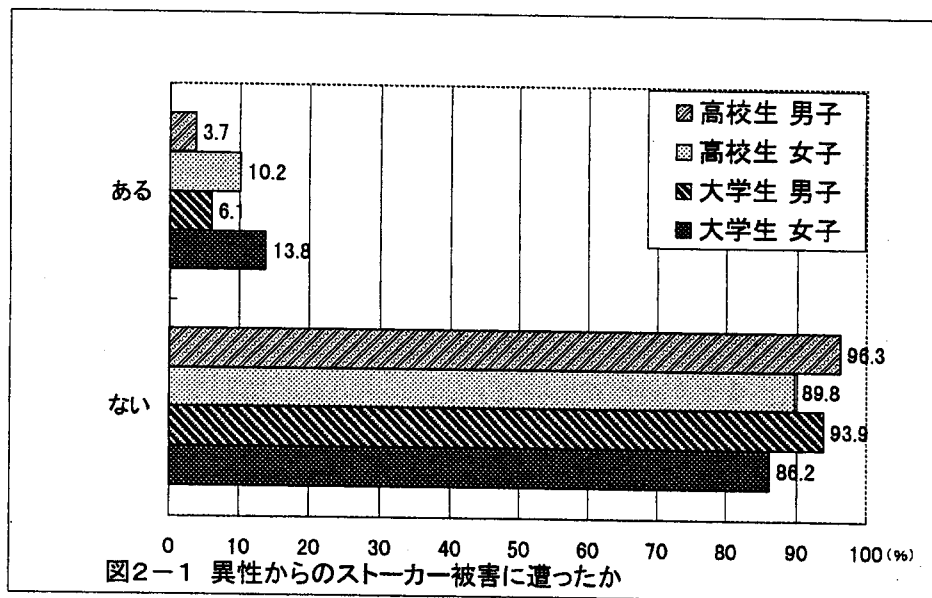
## 第2章 ストーカーからの被害

### 1. 調査対象者の被害の有無

まず、調査対象者である大学生の男女と高校生の男女に、異性からのストーカー被害を受けたことがあるかどうかを尋ね、被害を受けたことがある対象者に関しては、引き続きその内容について尋ねた。

#### ① 異性からのストーカー被害の有無

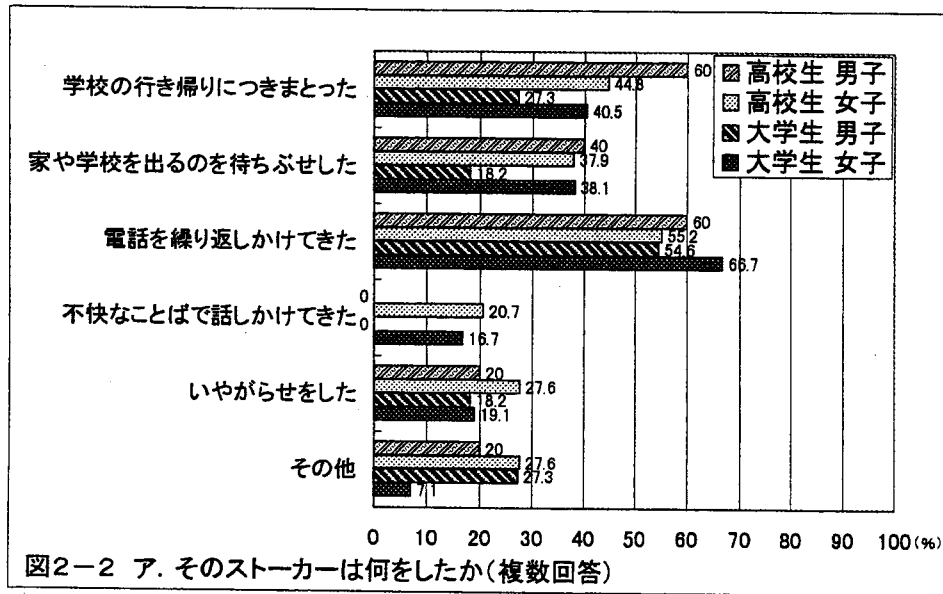
異性からのストーカー被害を受けたことがある割合は、図2-1のように、大学生女子と高校生女子で1割強と多いほか、大学生男子も5%を越えて高めである。高校生と大学生の間に差がみられ、ストーカー被害は加齢とともに増加していると考えられる。



#### ② そのストーカーは何をしたか

そのストーカーの行為内容に関しては、高校生の男女と大学生の男女という4グループの被害経験者数が異なるのと、被害経験者数が少数であるため、グループ間の単純比較はできないが、複数回答の結果は、図2-2のようになり、どのグループに関しても、「繰り返し電話をかけてきた」が6割前後で最も多く、「学校の帰りにつきまとう」と「家や学校を出るのを待ちぶせした」が4割前後とそれに次いで多い。「いやがらせをした」も約2割で、被害者の中では低くない割合である。

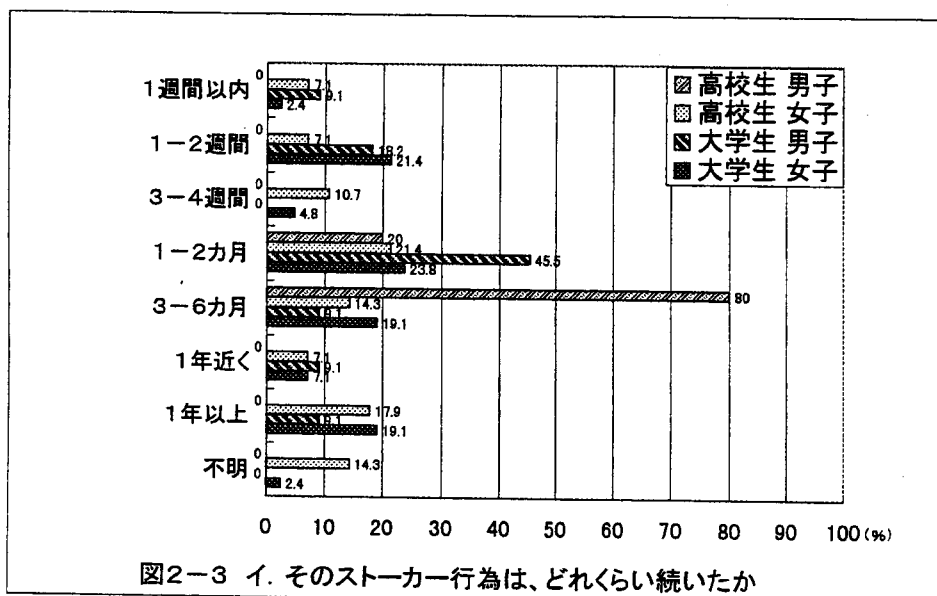
つきまといや待ちぶせだけでなく、電話を繰り返しかけてくるのがストーカーの最も特徴的な行動であるといえよう。



③ そのストーカー行為はどれくらい続いたか

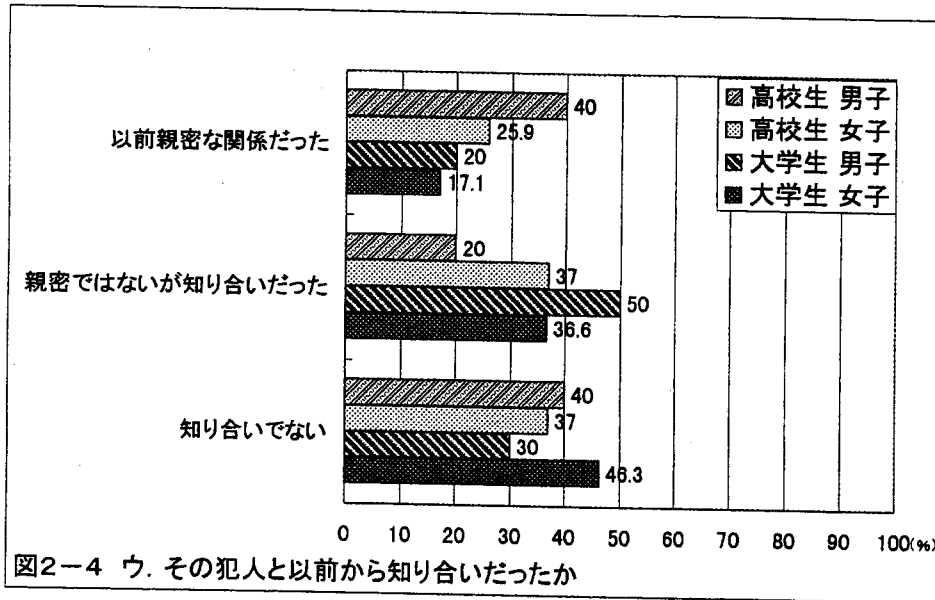
ストーカー行為の継続期間に関しては、図2-3のように、高校生では男女ともに1カ月から半年が多く、大学生では男子は1-2カ月が多めであるのに対して、女子では1-2週間から1年以上までほぼ2割と同様な割合で分布している。

全体的に見ると1-2カ月が最も多い。



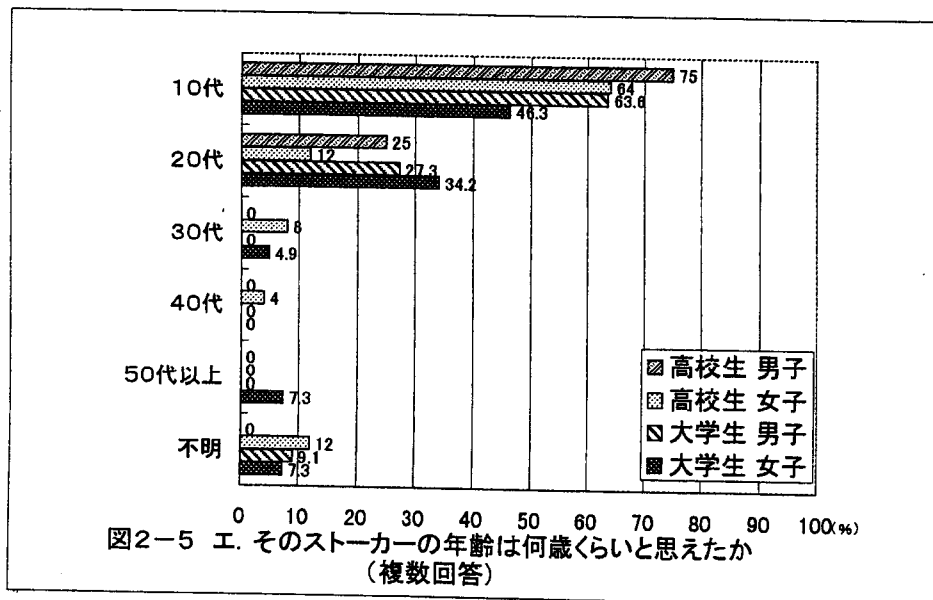
④ その犯人と以前から知り合いだったか

ストーカーである犯人との間の親しさに関しては、図2-4のように、高校生男子では「以前親密な関係だった」と「知り合いでない」に二分されているが、女子では親密でなかったり、知り合いでない割合が高い。大学生男子では知り合いが多いが、女子では知り合いでない割合が最も高い。総じて知り合い程度か、見ず知らずの人である割合が高い。



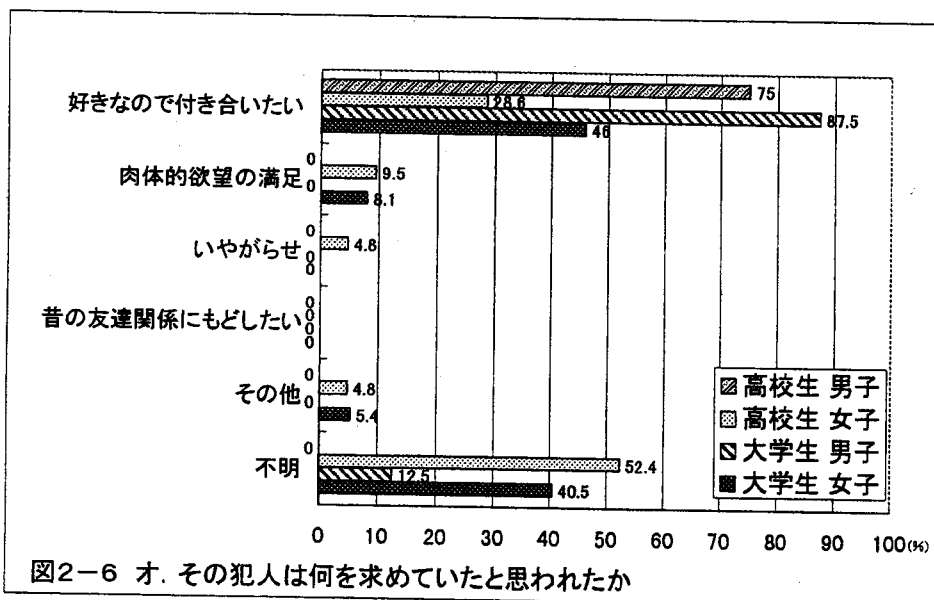
⑤ そのストーカーの年齢は何歳くらいと思えたか

ストーカーの年齢に関する複数回答の結果は、図2-5のとおりである。総じて10代が多いが、大学生の男女や高校生の男子では、20代も多い傾向がみられる。ストーカーの年齢は調査対象者である被害者とほぼ同年代と認知されており、30代以上は極端に少ない。



⑥ その犯人は何を求めていたと思われたか

ストーカーである犯人が何を求めていたと思われたかに関しては、図2-6のように、総じて「好きなので付き合いたい」が多いが、特に男子では女子より約2倍多くなっている。また、女子の場合には「不明」が4割以上と多めである。女性ストーカーの目的は男子には明確に認知されているが、男性ストーカーの目的はわかりにくい傾向があると考えられる。



⑦ ストーカー被害に遭ったとき、何をしたか

ストーカー被害に遭ったとき、何をしたかに関する複数回答の結果は、図2-7のとおりである。総じて、「友人に相談した」が多いが、警察に相談したり調査会社に頼んで調べる割合は低い。

女子の場合には、「親など身近な人に相談した」「ともかくいろいろ警戒した」「犯人にやめるように話した」「電話番号を変えた」が多めである。中でも、犯人と直接コミュニケーションをとる、「犯人に止めるように話した」が大学生と高校生のいずれも約3割と多く、犯人から何らかの危害を加えられる可能性を考えると、その危険性が懸念される。

⑧ その犯人はストーカー行為をやめたか

ストーカー行為の中止・継続に関しては、図2-8のように、高校生女子で「完全に止めたかどうか不明」が多い以外は、いずれのグループも「止めた」が過半数を占めて多いが、「止めない」も高校生・大学生ともに1割以上を占めている。

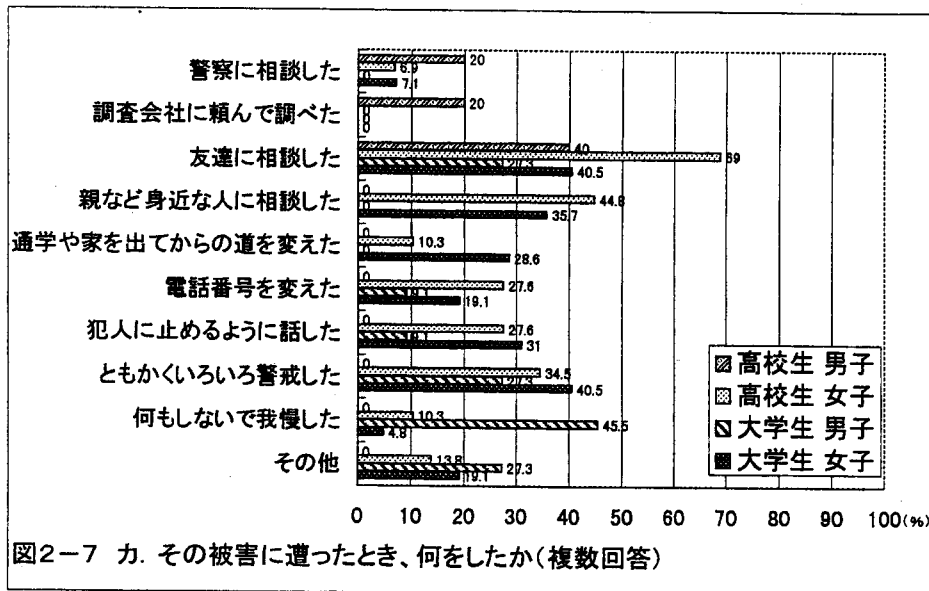


図2-7 カ. その被害に遭ったとき、何をしたか(複数回答)

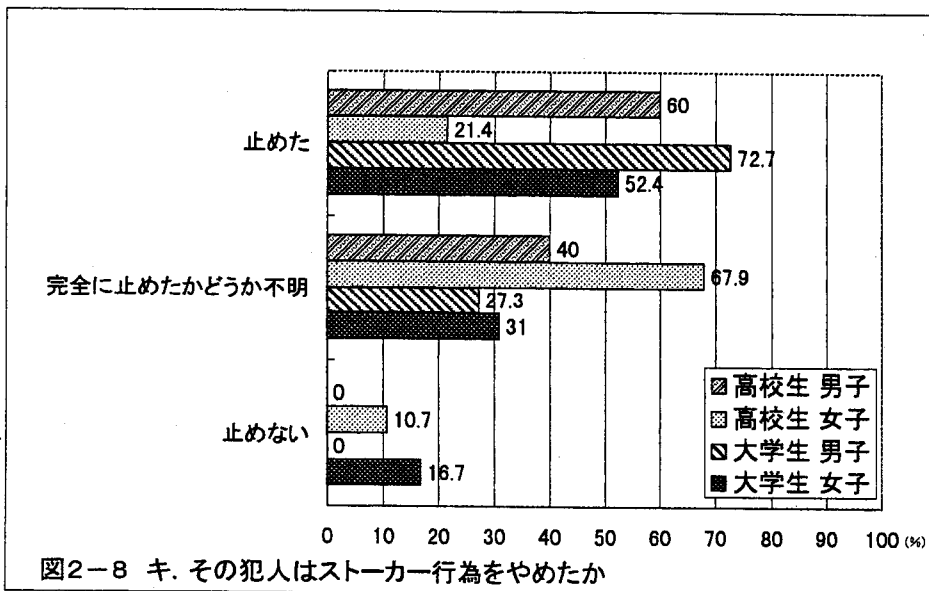
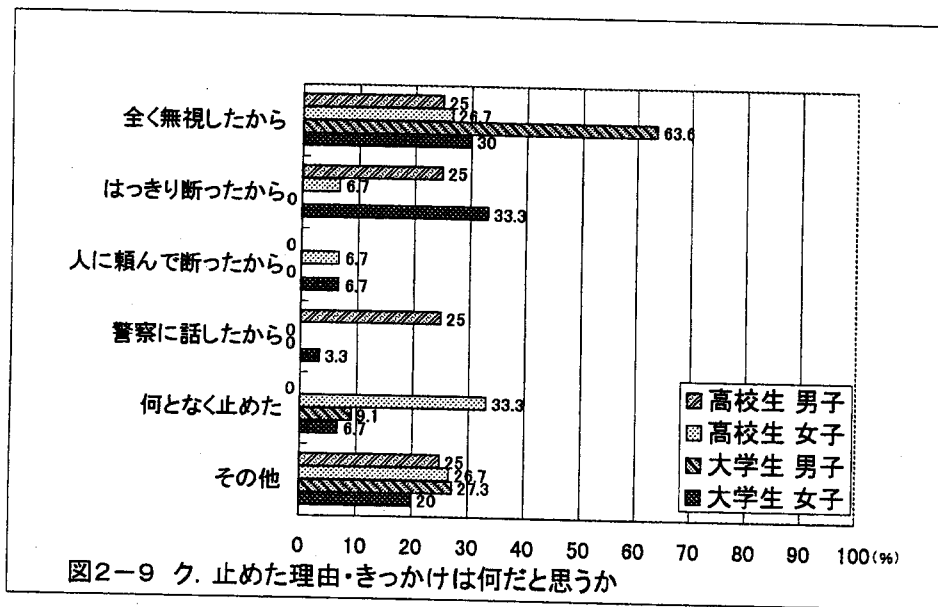


図2-8 キ. その犯人はストーカー行為をやめたか

⑨ 止めた理由・きっかけは何だと思うか

犯人がストーカー行為をやめた理由・きっかけは、図2-9のように、総じて「全く無視したから」が多いほか、高校生女子では「何となくやめた」が、大学生女子では犯人と接触することになる「はっきり断ったから」がそれぞれ多めであり、特に大学生女子に関して、接触した時に犯人から何らかの危害を加えられる可能性が懸念される。



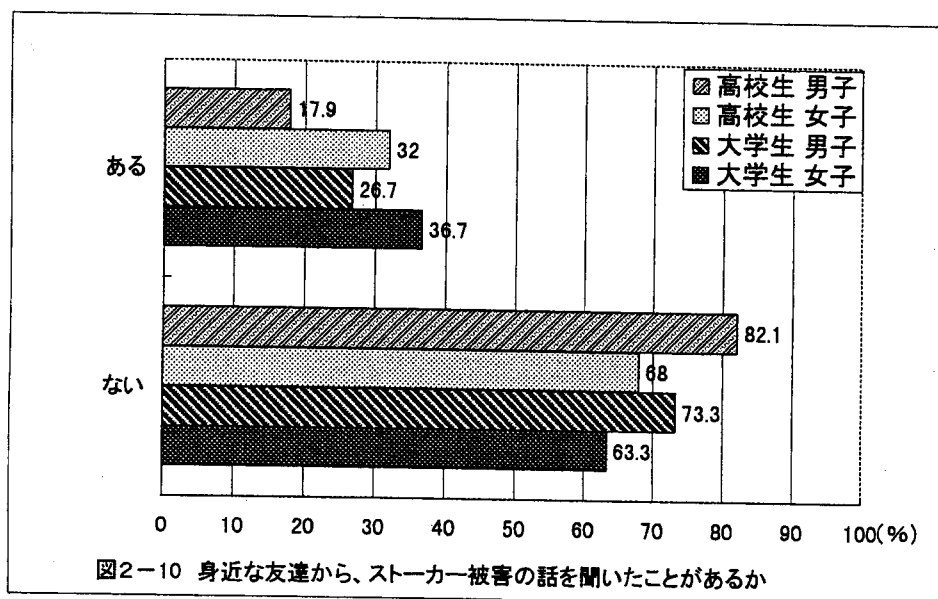
## 2. 身近な友人からの被害の見聞

調査対象者に、身近な友達から被害の話を聞いた経験があるかどうかを尋ね、自身がストーカー被害の経験をもたない対象者に関して、引き続きその内容について尋ねた。

### ① 身近な友達からストーカー被害の話を聞いたことがあるか

身近な友達からストーカー被害の話を聞いたことがある人の割合は、図2-10のように、女子では3割強、男子では2割前後であり、高校生よりも大学生の方が、若干割合が高い。

自身はストーカー被害を受けていないが、身近な友人からストーカー被害の話を聞いたことがある人に関して以下の集計を行った。



### ② そのストーカーは何をしたか

ストーカーの行為内容に関する複数回答の結果は、図2-11のとおりである。総じて、「電話を繰り返しかけてきた」「家や学校を出るのを待ちぶせした」「学校の行き帰りにつきまとった」が多いが、男子高校生では「家や学校を出るのを待ちぶせした」は少なく、「いやがらせをした」と「不快な言葉で話しかけてきた」が多めである。

本人が被害を受けた場合と、グラフの形はほぼ同じであるが、「学校の行き帰りにつきまとった」の割合は、伝聞情報の方が全体的に低めである。

③ そのストーカー行為はどれくらい続いたか

ストーカー行為の継続期間は、図2-12のように、総じて「不明」が最も多いが、「1-2カ月」がそれに次いで多い。ただし、高校生男子では「1週間以内」など、短期間の割合も多めである。

本人が被害を受けた場合と、グラフの形はほぼ同じである。

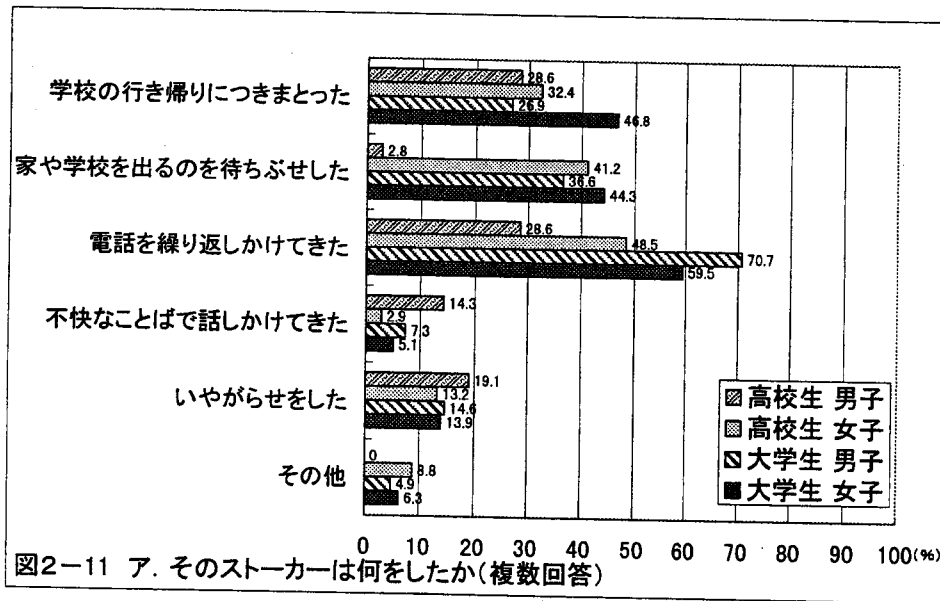


図2-11 ア. そのストーカーは何をしたか(複数回答)

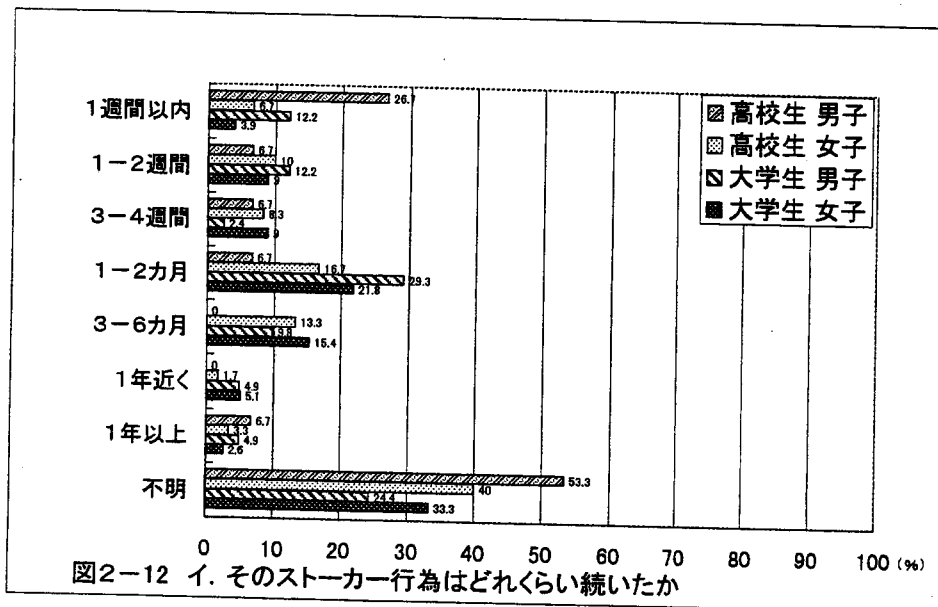


図2-12 イ. そのストーカー行為はどれくらい続いたか



④ 犯人と友人とは知り合いだったか

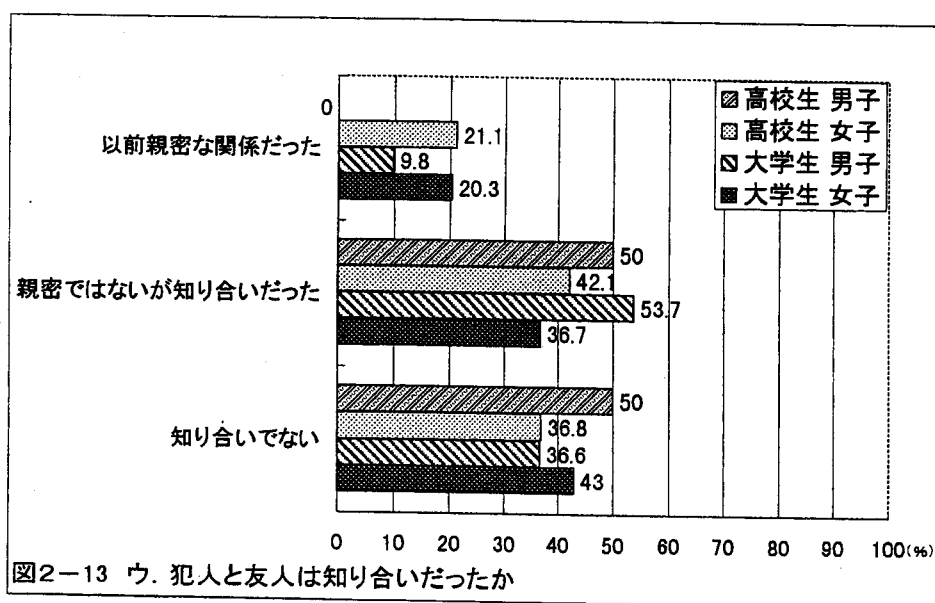
ストーカーである犯人との親しさに関しては、図2-13のように、総じて「親密ではないが知り合いだった」と「知り合いでない」が3-5割で多く、「以前親密な関係だった」はその割合が男子よりも多い女子であっても2割前後にとどまっていた。

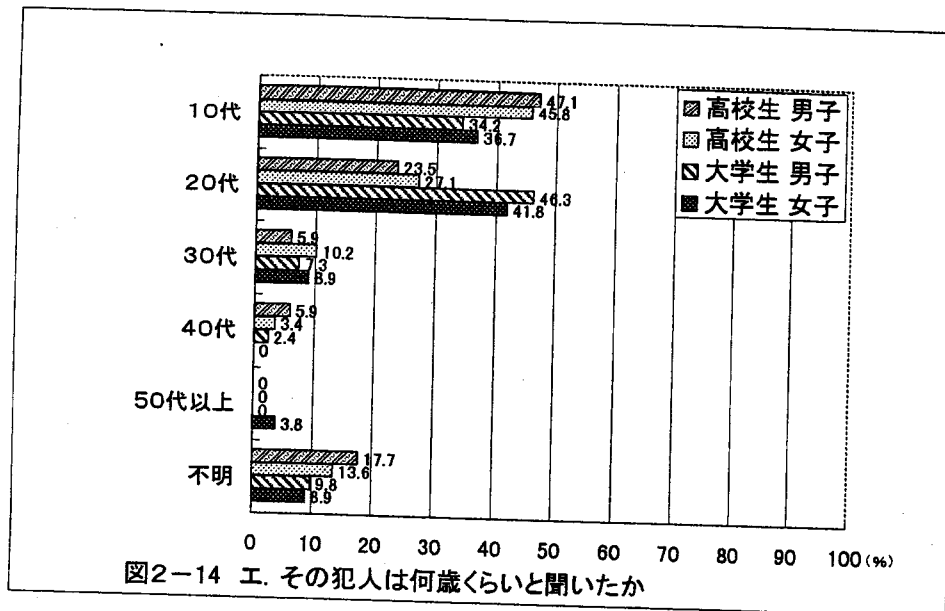
本人が被害を受けた場合とグラフの形は同様である。しかし、高校生男子の「親密でないが知り合いだった」と「知り合いでない」の割合は、伝聞情報の方が多くなっている。男子高校生は、見知らぬ人からストーカー行為を受けた話を友人から聞く割合が実際以上に多いといえよう。

⑤ その犯人は何歳くらいと聞いたか

ストーカーである犯人の年齢が何歳くらいと聞いたかに関しては、図2-14のように、総じて10代と20代が多い。ただし、10代は高校生で、20代は大学生で多い傾向があり、犯人の年齢と友達の年齢との間に対応関係がみられる。

本人が被害を受けた場合と比較すると、総じて30代・40代など、高年齢は伝聞情報の方が多い。また、大学生では20代が実際の被害以上に多く認識されていると考えられる。

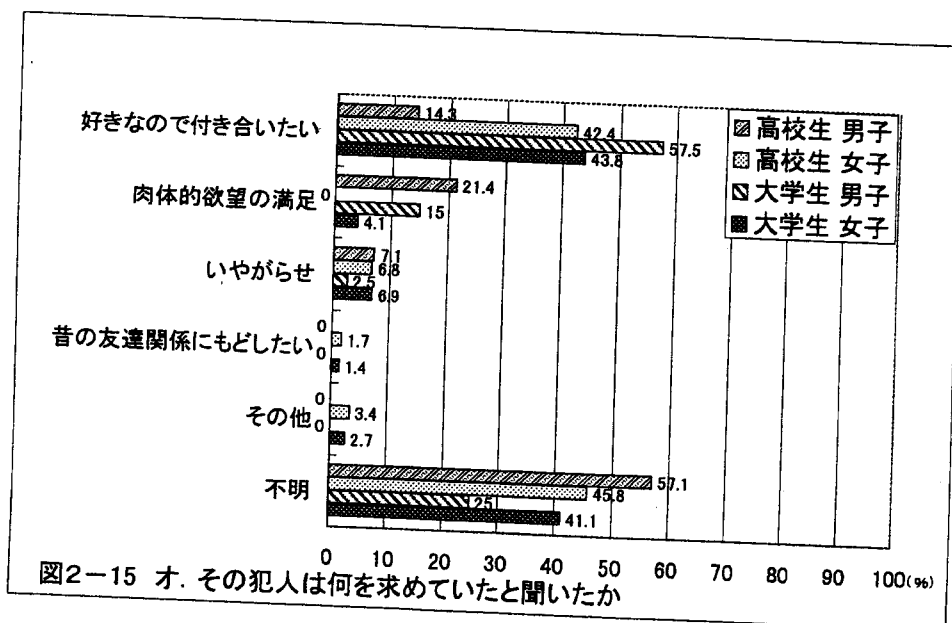




⑥ その犯人は何を求めていたと聞いたか

ストーカーである犯人が何を求めていたと聞いたかに関しては、図2-15のように、総じて「好きなので付き合いたい」と「不明」に二分されているが、高校生男子では、「好きなので付き合いたい」は少なく、「肉体的欲望の満足」が多めの傾向がみられる。

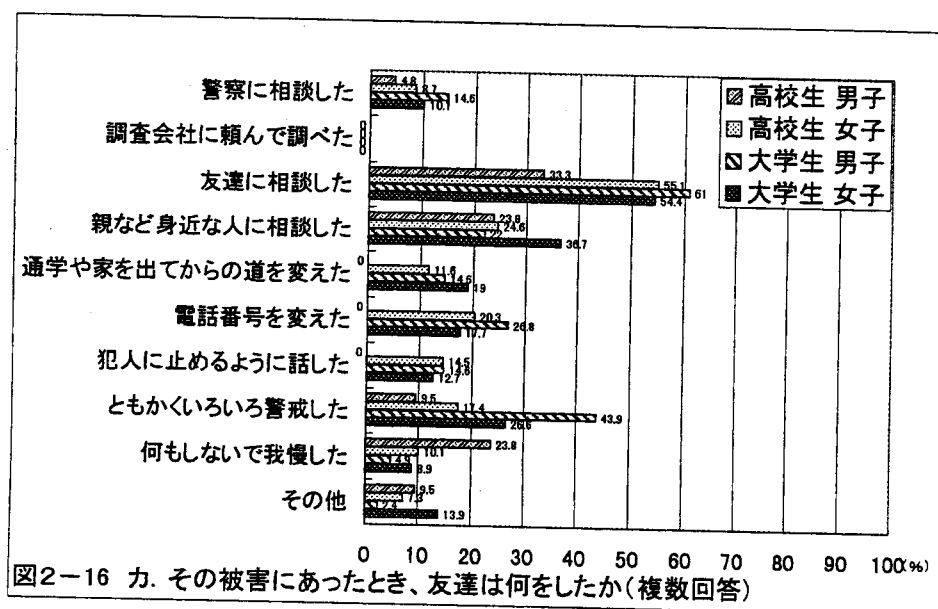
本人が被害を受けた場合と比較すると、伝聞情報では「いやがらせ」が全体的に多いほか、男子では「肉体的欲望の満足」が、女子高校生では「好きなのでつき合いたい」がそれぞれ多くなっている。



⑦ その被害にあったとき、友達は何をしたか

ストーカー被害があったときの友人の対応に関する複数回答の結果は、図2-16のとおりである。総じて「友人に相談した」が最も多く、「親など身近な人に相談した」と「ともかくいろいろ警戒した」がそれに次いで多い。また、「警察に相談した」は、1割前後にとどまっている。

本人が被害を受けた場合と、グラフの形はほぼ同様である。



⑧ その犯人はストーカー行為をやめたか

ストーカー行為の中止・継続に関しては、図2-17のように、「完全に止めたかどうか不明」が最も多く、次いで「止めた」「止めない」の順になっている。

本人が被害を受けた場合よりも、全体的に「止めた」の割合が低く、「止めたかどうか不明」の割合が高くなっている。したがって、伝聞情報が実際以上にストーカー行為を止めにくいものと認識させる可能性があると考えられる。

⑨ やめた理由・きっかけは何だと思うか

犯人がストーカー行為をやめた理由・きっかけに関しては、図2-18のように、総じて「何となく止めた」と「全く無視したから」が多く、女子の場合には高校生・大学生ともに「はっきり断ったから」が多い。女子の場合には、「全く無視したから」「はっきり断ったから」「何となく止めた」に三分されており、積極的な対応と消極的な対応の両方が効果を上げたと認

知られている。

本人が被害を受けた場合よりも、全体的に「何となく止めた」の割合が高めであり、明確な理由・きっかけが伝達されにくい傾向があると考えられる。

